

印象18編 —2021年11月の総評に代えて

○林 桂○

\*第1回口語詩句新人賞受賞の山田洲作氏が、短詩群集『天窓を開いて』（しろねこ社）を上梓された。投稿作品が一本にまとめられ、改めてその読み応えを実感できた。選考にかかわったひとりとして、祝福したい。新たな詩形、新たな書き手の登壇を実感できた。

さらに11月も投稿数が増え続けている。それに伴って作品の質も向上していると感じている。

●mi.●（東京都）

部屋に独り 案外よく笑う

\*独り暮らしの自分の姿を、第三者の目のようにして思った瞬間があるのだろう。「案外よく笑う」にある自己肯定感が好ましい。

●猫谷圭希●（広島県）

眠り姫なんて可愛いもんじゃない  
すこぶる寝相の悪い僕らは

\*「眠り姫」に例えをとっているので、作者は若い女性だろう。しかして、その実

態は、そんな「可愛いもんじゃない」と言う。結びの「僕ら」の人称の斡旋に感心した。敢えて男性人称を使っている。「僕」という人称を使う少女に時折遭遇する。そんな姿と重なる。のみならず、「僕ら」という複数形は、自分のことのみならず、同世代の一般の声として発していることでもある。

●さいう●（愛知県）  
すこしだけ丸まっている  
母の背にふれて  
パートのいちにちを聴く

\*「すこしだけ丸まっている」は、母に感じ取る微かな老いの姿である。パートタイムの仕事であったあれこれを（愚痴に近いものだろうか）を聴く娘（息子？）の姿は、必然として母を超えて、慈愛の眼差しを獲得している。

●さいう●（愛知県）  
アルバムの上に  
のすっと乗っかって  
猫は未来の方を見ている

\*「のすっと」のオノマトペに感心。いかにも猫。人事に左右されず、また慮りもせずにいる猫は、「未来の方」を見ているとしか思えない超然とした姿である。

●まちりこ●（埼玉県）

ブランコを立ち漕ぎしたい  
寂しさは揺らせば  
消える  
そんな気がして

\*「寂しさ」は揺らせば消えるという発想に感心。物理的な対処方法であるが、案外効きそうに思えてくる。じっとうずくまったりしては、寂しさは消えないのだろう。

●長谷川柊香●（宮城県）

古書店に秋光いちまいずつめくる

\*古書店での書見。その頁に差す秋の光りを一頁ずつめくる。そこに新たな秋の光りは生まれてくる。巧みな修辞だ。

●まちりこ●（埼玉県）

消し忘れたスナックの  
看板ネオンが輝くこんな真昼間

\*いかにも場末感の漂う風景。

●中矢温●（東京都）

ヒヤシンスに鬱と名付けて  
長く咲かす

\*ヒヤシンスに「鬱」と名付けるという発想に驚く。ヒヤシンスの花の形状まで「鬱」の形に見えてきてしまうから不思議。

●からすまあ●(神奈川県)  
駄目だって言ってるのに  
詩になりたがるきりん

\*とっさに工藤直子の「てつがくのライオン」を思い出した。ライオンが哲学になりたがるなら、キリンは詩になりたがるだろうと、対句のように思えたからである。

●さいう●(愛知県)  
耳の裏まで  
こしょこしょと洗い上げ  
いところをちびな猿の子にする

\*「こしょこしょ」がいい。歳の離れた幼いいところだろう。一緒に風呂に入って丁寧に洗い上げている。慕われているし、可愛がっているのだろう。その様子が生き生きと描かれている。

●トラノオノキスゲ●(群馬県)  
スナフキンは  
ギターと共にいるから  
不思議とさみしくないのさ

\* 楽器（音楽）の存在とは何か。一つの答えだろう。

● さいう ●（愛知県）

おかえり、のトーンで  
わかることもあり  
今日はわたしがシチューをつくる

\* 帰宅と同時に、母の不機嫌を察知して、夕飯を作る。母も一人の人間として、さまざまな心のコンディションの中に生きている。それを知っている娘（息子）は、既に大人である。

● 小山桜子 ●（東京都）

収骨の女よ、  
ばあちゃんの骨を  
そんな風に碎くな

\* 親族の視線の中で収骨するには、それ相応の配慮が払われている。きっちりとしたパフォーマンスの訓練を積んでいるに違いないと思う。しかし、それでも「ばあちゃんの骨を／そんな風に碎くな」という思いは湧く。

● 中矢温 ●（東京都）

喧嘩して蒲団きちんと君畳む

\* 蒲団をきっちり畳む姿は、いつもよりよそよそしい姿なのか、いつもと変わらない姿なのか、両方の読みが可能だろう。それにしても、蒲団の畳み方に着目したのは、いかにも目が利いている。

● 中矢温 ● (東京都)  
虫の闇ギターの内に木の素肌

\* 「ギターの内に木の素肌」の着眼点のよさ。

● まちりこ ● (埼玉県)  
定年の日に降る雨をしのぐのは  
コンビニで買ったワンタッチ傘

\* 晴れやかとも侘しいとも言える一日。その複雑な胸中を、巧みに表現している。

● 合川秋穂 ● (京都府)  
最後まで水が入っている体

\* 「最後」は「最期」でもあろう。「人体」を即物的に捉えれば、こうなるだろう。そして、即物的に捉えることで、違う次元の「人体」が見えてもくるだろう。

● 風見みどり ● (東京都)  
朝が来るたび思い出す  
銀の蛇口の水の冷たさ

\* 2行目。抒情の美しさ。